

ショートステイ利用の満足度及び在宅療養への影響

岩 下 清 子*
横 田 喜久恵**

はじめに

- I 訪問看護婦が把握したショートステイ利用の利点と問題点
- II ショートステイ利用後の変化
 - 1 本人の変化及び介護負担の変化
 - 2 介護者の老人を世話する気持及び家族関係の変化
- III ショートステイ利用の満足度
 - 1 家族にとっての評価
 - 2 本人にとっての評価
- IV ショートステイ利用後の本人の変化及び満足度の背景
 - 1 病状の変化とその他の変化
 - 2 本人の属性・性格と変化及び満足度
 - 3 家族の中での本人の位置と変化及び満足度
 - 4 ショートステイ利用についての本人の納得度と変化及び満足度
 - 5 ショートステイ利用経験の有無と本人の変化及び満足度
- V ショートステイ利用後の家族の変化及び満足度の背景
 - 1 介護負担の変化の背景
 - 2 介護者の老人を見る目及び家族関係の変化の背景

おわりに

* 日本看護協会調査研究室（執筆責任者）

** 特別養護老人ホーム鶴生園（調査票設計時の助言，筆者との事例検討，事例の執筆を行った）

はじめに

ショートステイ制度の目的は「居宅における寝たきり老人等を介護している者が病気、出産等の一時的な事情により介護ができなくなった場合に特別養護老人ホームの空きベットを利用して老人を一時的に保護し、介護者の負担の軽減を図るとともに、保護の要件が解消した時点で再び家庭生活を継続させることにより、寝たきり老人等及びその家庭の福祉の向上を図る」とされている。

このようにショートステイは、一時的な家族介護の代替を老人ホームにおいて提供するものであるが、老人にとっては一時的な環境の変化を体験することとなる。そしてそのことが、その後の在宅療養にプラスあるいはマイナスとなる何らかの変化をもたらす場合もありうる。また、本人の変化は家族にとっても、その後の介護負担に何らかの影響を及ぼす。ショートステイはあくまで一時的なサービスであり、在宅療養の継続を期待するならば、これらの点に目を向ける必要がある。

またショートステイの受け入れは、介護者側の事情で判断されるため、サービスの評価も介護者中心となり勝ちで、ショートステイでの生活は本人にとってどのようなものであったかという視点が看過され勝ちである。

そこで本研究は、第1に、ショートステイ利用による、その後の在宅療養に影響するような本人及び家族の変化、ショートステイ利用の本人及び家族の満足度を概観すること、

第2に、それらに影響している要因を明らかにすることを目的とした。但し今回は、本人及び家族側の要因にのみ着目しており、ショートステイで受けたサービスの質との関係については、今後の検討課題としている。

なお本稿は、前掲「ショートステイ・サービスに関する調査」(53頁参照)のほか、「訪問指導従事者の実態及び意識に関する調査」の結果の一部を活用した。後者の調査の概要は、次のとおりである。

調査者：日本看護協会調査所研究室

調査の時期：昭和62年7月

調査対象：

全国500の市町村（または政令市・特別区の保健所）にて訪問指導事業のために雇用されている非常勤看護職

調査方法：

調査票郵送自記式

有効回収数（率）

814（78.4%）

（調査結果の全容は本誌No.26<昭和63年7月刊>に収録されている）

また、「ショートステイ・サービスに関する調査」結果の分析にあたっては、調査対象数や質問項目の制約などにより統計的手法ではとらえられない因果関係をみい出すため、あわせて事例検討を行った。事例検討については福島廣子（特別養護老人ホーム・鶴生園、コーディネータ）、真保真知子（同、看護婦）、

松本修二（特別養護老人ホーム・シャローム，生活指導員）各氏の協力を得た。

I 訪問看護婦が把握したショートステイ利用の利点と問題点

訪問看護婦は、対象者の在宅療養を継続させるべくショートステイの利用をすすめることはよくあるが、利用後も引き続き訪問を続けることから、利用結果についても関心を持っている。そこで前記「訪問指導従事者の実態及び意識に関する調査」において、調査対象である訪問看護婦が今までに受け持った訪問対象者で、ショートステイを利用したケースがあるか否か、利用して良かった点、悪かった点として本人や家族からどのようなことを聞いているかについて問うた（訪問看護婦とは、正確には、老人保健法に基づく訪問指導事業に従事している非常勤看護職である。年齢、平均48.7歳。訪問指導従事期間、平均5.0年。訪問指導従事前の看護職としての就業年数、16.2年）。

受け持った対象者の中にショートステイを利用した者がいるか否については、表1のとおりであった。半数強が「あり」と答えており、大きな都市ほど良く利用されていること

表1 今までに受け持った訪問対象者にショートステイを利用したケースがあるか(訪問看護婦数・率)

		利用者の有無			計
		あり	なし	ショートステイは実施されていない	
訪問看護所 所属先の 明	政令市・特別区	95 [^] (64.2) %	53 [^] (35.8) %	0 [^] (0.0) %	148 [^] (100.0) %
	市	201 (59.6)	129 (38.3)	7 (2.1)	337 (100.0)
	町	106 (44.0)	115 (47.7)	20 (8.3)	241 (100.0)
	村	14 (33.3)	24 (57.1)	4 (9.5)	42 (100.0)
	不明	17 (47.2)	17 (47.2)	2 (5.6)	36 (100.0)
	計	433 (53.9)	338 (42.0)	33 (4.1)	804 (100.0)

がわかる。

ショートステイを利用したケースが「ある」と答えた433名中、305名が利用結果に関する自由記述の回答に答えている。305名中、利用して良かった点のみ記入したのは133名、良かった点と悪かった点の両方を記入したのは125名、悪かった点のみ記入したのは47名であった。

回答の内容は多岐に渡っているが、最も多い回答は当然ながら、ショートステイが介護代替機能を果たしたことを評価するものである。その内容は次のとおりである。

- 介護者が病気の時（または出産時）安心して療養できた。
- 安心して預けられるので良かった。
- 介護者の疲労が回復した。
- 冠婚葬祭に出席できた。
- （農繁期やお店が忙しい時など）家業に専念できた。

- 他の家族の入院手術の時、安心した看病ができた。
- 家族（揃って）の旅行（外泊，外出）ができた。
- 介護者が外での用を足すことができた。

また、これら介護の代替がなされた結果としての、介護者や周りの人の気持の変化などがあげられている。

-
- 気分的に余裕が出来いらいらしなくなった。
 - ショートステイがあるという安心感や心強さで介護が続けられる。
 - 他の親族が介護の大変さを理解してくれるようになった。
 - （呆け症状のある）親を再び親として受け止められるようになった。
 - 福祉サービスのことをいろいろと知る機会になった。
 - ホームという所の誤解がとれた。
 - 介護方法を詳しく教えてもらえた。

以上のように、ショートステイを利用したことは、家族・介護者にとっては「良かった」とする回答がほとんどであるが、老人にとっては、プラスの評価だけでなくマイナスの評価もみられる。老人にとっての評価で最も多い回答内容は、ショートステイでの生活が老人にとって快適なものであったか否かに関するものである。

プラスの評価：

- 老人の気分転換になった。
- 入浴サービスが受けられるのが良かった。
- 園の行事に参加できて楽しかった。
- リハビリなど施設のいろいろなサービスが受けられてよかった。
- 定期的おむつ交換，入浴できれいにしてもらった。
- 食事や環境が良かった。
- 冷暖房完備で過ごしやすかった。
- 職員の励ましや暖かさに感激した。
- 他の親族にみてもらうより，老人が気がねしなくてよい。
- 家では一人だが，話し相手がいてよかった。

マイナスの評価：

- 食事が口に合わない。
- 下膳が早く，ゆっくり食べられない。
- 入浴させてもらえなかった。
- 入浴が機械的すぎる
- 介護が行き届かない。
- 同室者に気を使う。気がねしてストレスになった。
- 他の呆け老人の徘徊に悩まされた。
- 呆け症状のある人と一緒なのが嫌だった。
- 男女同室が嫌だった。
- 他の老人と良い付き合いができなかった。
- 退屈であった。
- さびしい思いに耐えていた。
- 眠れなかった。

次に注目すべきは、ショートステイでの生活がどうであったかということが、入所時の

快・不快に留まらず、その後の在宅療養に影響するような身体的・精神的変化をもたらしている点である。この点についてもプラスとマイナスの影響がある。

プラスの影響：

- 外からの刺激を受けて社会性が育った。
 - 自力でできることをするようになった。
 - 生活が規則的になり意欲がでてきた。
 - 周囲への関心を示すようになった。
 - 呆け症状がよくなった。
 - 家庭のよさ、あたたかさがわかった。
 - おむつがとれた。
 - 褥瘡が少しよくなった。
-

マイナスの影響：

- 病気になった。
 - 呆け症状が悪化した。
 - 食欲がなくなった。
 - 衰弱した。
 - おむつを当てるようになってしまった。
 - 時間的なおむつ交換で尿意を訴えなくなった。
 - 生活リズムが狂ってもとに戻るのが大変であった。
 - 戻って来てやる気をなくしてしまった。
 - 利用前よりも口数が少なくなった。
 - 介護者の顔を忘れてしまった（痴呆老人）。
 - 褥瘡ができてしまった。
 - 思いがけぬけがをした。
-

老人にとってのショートステイ利用の評価は、同種の事柄について、プラスとマイナスの評価がみられる。たとえば、普段と異なる環境、異なる人々との交わりの体験は、一方では、「気分転換になった」、「話し相手がいってよかった」、「社会性が育った」などプラスの評価を生み、他方では「同室者に気を使ってストレスとなった」、「呆け症状のある人と一緒なのか嫌だった」、「さびしかった」などマイナスの評価を生み出している。時間毎のおむつ交換を「きれいにしてもらえてよかった」と評価する者もいれば、「尿意をなくしてしまった」という結果を指摘する者もいる。結果だけを見た場合、呆け症状が「よくなった」者と「悪化した」者、「褥瘡がよくなった」者と「褥瘡ができてしまった」者、「おむつがとれた」者と「おむつを当てるようになってしまった」者、「意欲がでてきた」者と「やる気をなくしてしまった」者といった対照的なケースが存在している。

そもそもショートステイの利用は、環境の変化、他人の中に入る緊張、家庭とは異なる規律や介護のやり方などから、老人にとって不快な体験やマイナスの変化を生じやすいと考えられるが、逆に老人にプラスに機能する場合もあることがわかる。そして、プラスやマイナスの変化の有無は一方では施設のケアの質に、他方ではショートステイ利用者側の条件に関係していると思われる。

施設のケアの質に言及した回答は、感謝・信頼を寄せるものから、不満・不信の表明までであり、ケアの施設格差が大きいことが推測されるが、今回の研究では、ケアの質に着目

する必要性についての問題提起に留めておく。そして、老人自身の性格や病状、家庭内での位置づけ、ショートステイ利用の経緯などが、ショートステイ利用の評価や心身の変化とどう関係しているかについては、第IV章で考察

することとする。

なお、ショートステイ利用手続きに関する苦情を記した回答も数多くみられたが、この点に関しては、稿を収めて詳説する。

II ショートステイ利用後の変化

この章以下は、前記「ショートステイ・サービスに関する調査」の結果及び事例検討をもとに分析をすすめる。

この章で扱うショートステイ利用後の利用者本人及び家族の変化、次の章で扱う本人及び家庭の満足度は、いずれも利用者の主たる介護者の回答による。そして、その判断も、時間と共に変化すると考えられるが、調査方法上の制約から、ショートステイ利用直後の回答から、数年前に利用した時のことを思い出して回答したものもあり、それらを一括して扱っていることもお断りしておきたい。ショートステイを利用した時期（数回利用した時は最後の利用）は、表2のとおりである。利用年により回答に差が生じている点については、後述する。

なお、ショートステイ利用日数は表3のとおりであり、これも一括して扱っているが、ショートステイ利用後の変化及び満足度に、利用日数による差はほとんどみられなかった。

調査結果を読む上で、さらに次のことを考慮する必要がある。すなわち、ショートステイ利用家族の中には、ショートステイ利用を契機にすっかり介護意欲をなくしたり、そも

そも家庭介護の限界に来ていても、どこにも受け入れ先がないため、とりあえずショートステイを利用したケースもあって、ショートステイ利用老人の中には、その後老人病院に入院したり老人ホームに入所したケースも少なくない。しかし回答を寄せた人の大半は、今も在宅介護を続けている介護者である（表4）。そしてその中でも、在宅介護に熱心な人、再度ショートステイを利用したいと思う人ほど、回答率が高いと推測されることである。

表2 ショートステイ利用年

	人 数	%
昭 和 60 年	4	2.9
61 年	18	12.9
62 年	49	35.3
63 年	60	43.1
無 回 答	8	5.8
計	139	100.0

表3 ショートステイ利用日数

	人 数	%
1 ~ 4 日	21	15.1
5 ~ 7 日	48	34.5
8 ~ 14 日	29	20.9
15 日 以 上	34	24.5
無 回 答	7	5.0
計	139	100.0

表4 本人の現在の状況

	人 数	%
死 亡	12	8.6
老人ホーム入所	6	4.3
入 院	5	3.6
在宅療養継続	116	83.5
計	139	100.0

1 本人の変化及び介護負担の変化

まず、老人が帰宅した時、ショートステイ利用直前と比べ精神・身体状態に変化があったか否かについて問うた結果をみてみよう。身体面の変化は表5、精神面の変化は表6に示すとおりであった。

次に、老人の精神・身体状態の変化により、その後の家庭での介護負担に変化があったか否かを問うた結果は、表7のとおりであった。負担が減った場合も増えた場合も、その内容としては精神的負担、肉体的負担が相半ばしている。自由記述の回答より具体的にみてみよう。

1) 本人の精神的変化により介護負担が減った。

○自分より体が不自由な方がいることを知り、少し自信がわいた様で、「淋しい」、「たい

事例1 ショートステイ利用が在宅療養の終りになってしまったMさん

10年前妻に先立たれたM氏（90歳）は、5人の息子の間を転々とし、ショートステイ利用時は四男夫婦と同居していた。昔から頑固な性格のためどこにいても折り合いが悪かったという。

3年前、軽い脳梗塞発作を起し短期入院してからは尿漏しが始まり、歩行も一本杖を両手でついてやっと歩行できる状態である。入浴も一度もしていない。そんなM氏の介護にほとんど疲れはてた四男の嫁は、近所の人から聞いたとデイ・サービスを申請した。週一回であるがM氏にとっても家族にとつてもデイ・サービスに通うことは気分転換となり、ひとときの安らぎとなった。しかし頑固で、まだら呆けのM氏は、「呆けるのがイヤだから仕事に行く」と自力でタクシーを呼び東京の旧知人宅を訪ずれ、先方からは迷惑がられ直ちに迎えにくるようにと自宅に電話が入ったり、また、あちこちの旧友人達に電話をかけ通して、電話代が月10万円にも達することがたび重なった。

家族はM氏の介護に疲れ果て、一週間のショートステイを申請した。M氏も1週間くらいであればと静養するつもりで入所した。四男夫婦にとってはたった一週間といえM氏の不在は想像以上に快適な生活をもたらした。今まで我慢して介護し続けてきたことの大変さを考えると、再び自宅に引きとり、介護をする気になれず、このまま入院先を探して欲しいと申し出てきた。

結局M氏の受け入れ先は、閉鎖病棟のある精神病院しかなかったのであるが、家族にとっては、どんな所であれ引き受けてさえもらえれば良いというところまで、介護の限界にきていたのである。

表5 身体状態の変化

(おとしよりがショートステイ先から自宅にもどられた時、ショートステイ利用直前と比べ身体状態に変化がみられましたか。)

	顔 つ や	食 欲	寝がえりや体をおこすこと	排泄の自立・訴え	床 ず れ	病 状
良くなってもどってきた	36 [^] (25.9)*	26 [^] (18.7)*	14 [^] (10.1)*	14 [^] (10.1)*	8 [^] (5.8)*	15 [^] (10.8)*
悪くなってもどってきた	1 (0.7)	1 (0.7)	3 (2.2)	1 (0.7)	2 (1.4)	5 (3.6)
変化なし	70 (50.3)	73 (52.6)	51 (36.7)	79 (56.8)	29 (20.9)	71 (51.0)
もともと問題なかった	24 (17.3)	33 (23.7)	60 (43.1)	36 (25.9)	87 (62.5)	39 (28.1)
無 回 答	8 (5.8)	6 (4.3)	11 (7.9)	9 (6.5)	13 (9.4)	9 (6.5)
計	139(100.0)	139(100.0)	139(100.0)	139(100.0)	139(100.0)	139(100.0)

表6 精神面の変化

(おとしよりがショートステイ先から自宅にもどられた時、ショートステイ利用直前と比べ精神状態に変化がみられましたか。)

(1) 会 話

	人 数	%
よく話をするようになった	22	15.8
話しかけが少なくなった	0	0.0
変りない	111	79.9
無 回 答	6	4.3
計	139	100.0

(2) や る 気

	人 数	%
進んで自分でしようとするようになった	17	12.2
自分からしようとしなくなった	5	3.6
変りない	110	79.2
無 回 答	7	5.0
計	139	100.0

(3) 家族への気持

	人 数	%
家族に協力的になった	14	10.1
家族に文句が多くなった	4	2.9
変りない	115	82.7
無 回 答	6	4.3
計	139	100.0

くつ」などの言葉が一時的にせよ少なくなり、周囲の者は一時的に気が楽になった。
 ○以前より素直に行動してもらえるので、余

表7 介護負担の変化

(ショートステイ利用でおとしよりに変化があったことにより、その後の家庭介護の負担に変化がありましたか。)

	人 数	%
負担が減った	15	10.8
負担が増えた	9	6.5
変りない	95	68.3
無 回 答	20	14.4
計	139	100.0

りあわてず、気軽に介護ができるようになった。

- 帰宅後2日間位は協力的でやりやすい面があるが、すぐ元に戻ってしまった。
- 家族の話をよく聞くようになり、楽になった。
- 自宅が一番よいと感じてくれた。

2) 本人の日常生活動作改善により、介護負担が減った。

- ギャジベットを起こすと、自分で食事をするようになった。
- 日中車椅子で過ごせるようになった。
- 入浴が殆んど手を貸さなくてもできるよう

になった。

- トイレの都度手がかかっていたが、大変楽になった。
- トイレへ自分で行く気持が前より強くなった。

3) 呆け症状が悪化し介護負担が増えた。

- 夕方になると家の中を歩き回る状態が1か月程続いた。
- 言うことが全く理解できないことが多くなった。

4) 身体面の変化があり介護負担が増えた。

- ショートステイ中便秘していたようで、帰宅してから2日位排便の苦労があった。
- 寝てばかりいたのか、きき足であった左足まで弱ってしまい、それを元に戻すのに2～3週間かかった。
- 家では伝い歩きをしていたが、ホームでは車椅子を使用していたため、足元が不安定になった。
- 身体を支えると歩けたのにショートステイ利用後、一時歩こうとしなかった（ホームでは車椅子を使用）。
- ショートステイ中に骨折を起し、手術のあと痴呆が前より進み、歩行できなくなり、おむつを使用するようになった。

全般的にみて、ショートステイ利用後、本人あるいは介護負担に変化のあったケースは

それほど多くない。老人は環境変化への適応が困難であるにもかかわらず、マイナスの影響があったケースが少ないのは、何よりゆき届いたケア（調査協力を得た3つの施設は、ケアの質がかなり高いと筆者には思われる）によると思われる。但し、前述したようなショートステイ利用者の中での回答者の偏りや利用者としての多少の遠慮により、マイナスの変化や評価が出にくいことも考慮しておく必要がある。

また、プラスの変化もマイナスの変化も利用直後には変化があったとしても、月日がつにつれて印象が薄れ、回答には表れない場合もあろう。すなわち、プラスの変化は持続しない場合が多い（このことは自由回答からも推測される）ために忘れ去られ、多少のマイナスの変化は、どのみち老人は衰えて行くという現実の中に埋没してしまうのではなかろうか（但し、もし利用者の施設に対する不信感があると、ショートステイ利用を契機に状態が悪化したとして、いつまでも記憶に残ることもありうる）。

ちなみに、老人本人のプラスの変化と、その結果としての介護負担の軽減について、ショートステイ利用年との関係をもてみた（表8）。それによれば、ショートステイを利用してから回答までの年月の隔たりが大きいほど、プラスの変化や負担の軽減があったという回答は減少している。このことは、上述したプラスの変化が忘れられていくことを裏付けていよう。（マイナスの変化や負担の増加についてはケースが少ないので、統計的分析不可）

環境変化によるマイナスの影響を防ぐための配慮——鶴生園の場合——

ショートステイ制度は在宅介護をして行くうえで大変効果のある事業（制度）という評価のもとに広がってきたが、これはあくまでも介護者側にとっての評価であり、本人（老人）自身にとってのものではない。

ショートステイを引き受ける側としては、介護する家族と介護を受ける老人の双方の事情や心理状態を十分把握し、尊重しなければならない。また、老人は環境変化によるマイナスの影響を受けやすいこと、さらにショートステイが終わったらまた元の生活に戻ることを考えるなら、老人の健康状態、病歴、家庭での生活のし方を把握し、ショートステイ期間中もできるだけ今まで通りの生活ができるよう配慮する必要がある。

このような考えのもとに、当園では以下のような手順をふんだ援助を行っている。

1 役所からの連絡を受けたら、必ず当園職員2名（看護婦と生活指導員または寮母と生活指導員）で訪問し、自宅での生活状況を把握する。その際、特に次の点に注意を払う。

- 老人の入所にあたる気持や不安
- 家族の介護のし方
- 寝具はベットか布団か
- 食事の種類（朝食はパンか粥か常食か）
- 排泄のし方（便器の使い方、排便の間隔と最後に排便のあった日時、下剤の使用のし方など）
- 衣類について（夜は寝衣に着がえるか）
- その他（メガネ、義歯、補聴器、杖の使用、常備薬の有無など）

2 入所当日はできるだけ訪問した職員が受け入れるように心がける。またその日の担当職員が訪問で得た情報を元に本人や家族と面談し、衣類その他持参物のチェックをする。

3 退所後1週～2週の間電話にて退所後の経過を把握し、今後のショートステイ受け入れ上の参考にする。

ホームで実際に老人の援助に当る寮母や看護婦が老人の家庭を訪問することのメリットは大きい。寮母や看護婦は、ホームにあっても家庭で暮らす老人のイメージを持って接するようになり、老人や家族にも「事情を知ってくれている人がいる」という安心感を与えている。

2 介護者の老人を世話する気持ち及び家族関係の変化

ショートステイを利用したことにより、介

護者の老人を世話する気持ちに変化があったか否かを問うた結果は、表9のとおりである。

8割余の介護者が、「介護が困難になった時受け入れてくれるところがあることがわかり、

表8 ショートステイ利用年別本人及び家族の変化

	ショートステイ利用年			有意差* (62年以前と 63年)
	昭和60・61年	昭和62年	昭和63年	
ショートステイ利用年別ケース数	22 [^] (100.0)%	49 [^] (100.0)%	60 [^] (100.0)%	
上記ケースのうち				
排泄の自立・訴えが好転したケース	0 (0.0)	4 (8.2)	9 (15.0)	
進んで自分でできるようになったケース	1 (4.5)	1 (2.0)	14 (23.3)	○
家族に協力的になったケース	1 (4.5)	2 (4.1)	11 (18.3)	○
よく話をするようになったケース	2 (9.1)	7 (14.3)	13 (21.7)	
介護負担が減ったケース	1 (4.5)	2 (4.1)	12 (20.0)	○

注* 利用年は62年以前と63年の2グループに、変化はプラスの変化があった場合とそれ以外の2グループに分け、2×2クロス表のカイ2乗検定を行った。○印は危険率5%以下(イエーツの修正値)で有意差があることを示す。

表9 老人を世話する気持の変化(複数回答)

(ショートステイを利用したことにより、あなたのおとしよりをお世話する気持ちに変化がありましたか。)

	回答数	%
特に変りはない	31	23.3
介護が困難になった時受け入れてくれるところがあることがわかり、気が楽になった	109	82.0
としよりを今までと違った目でみられるようになりとしよりを受けとめやすくなった	25	18.8
前にも増して気が重くなった	0	0.0
その他の変化	0	0.0
計	165	124.1

回答者数 133

「気が楽になった」と答え、2割弱の介護者は、「老人を今までと違った目でみられるようになり老人を受け止めやすくなった」としている。後者の変化は、老人から一時離れ自分を振り返る余裕や、ショートステイ先で家にいるのとはまた違った老人の姿を見る機会を持ったことなどによるものであろう。

次に、ショートステイを利用したことにより、家族関係や親族関係に何か変化があった否かを問うたところ、結果は表10のとおりであった。家族関係が良いということは在宅介護を継続する上で重要なポイントであることを考えると、家族関係が好転したケースが少

表10 家族・親族関係の変化

(ショートステイを利用したことにより、家族関係や親族関係に何か変化がありましたか。)

	人数	%
家族関係がよくなった	22	15.8
家族関係が前より悪くなった	3	2.2
変りない	109	78.4
無回答	5	3.6
計	139	100.0

なからずあるということは、注目に値する。

では、その変化の内容を自由記述の回答からみてみよう。

1) 本人の変化が家族関係にプラスになった。

- 寮母さんのお話や仲間との会話によって、病人は自分だけでないという事がわかり、あまり家族に無理を言わなくなった。
- 集団生活により、我がママが少しよくなったように思えた。

2) 介護者の負担が減ったことが、家族全体にプラスとなった。

- 介護者の体力が一時的でも回復し、他の家

- 族の負担が減った。
- 娘達が私のことを心配し、一週間でも老人から解放され、ストレスがなくなることを喜んでくれる。
 - 家族全体に目くばりができる。
 - 娘や親族を訪ねることができた。

3) 老人がいない間、家族全員ほっとした。

- 母の呆け症状がひどく、子供がノイローゼになりそうだと言い出した。母の留守の間は皆がほっとした。
- ショートステイを利用している間、家族の神経のいらだちがなく、落ち着いた気持ちでいられた。

4) 家族の、老人への思いやりが増した。

- 息子も娘も、祖母を一日も早く家に連れて帰り、家族の団らんに戻してやりたいと、面会の度に痛感したようだ。祖母への思いやりが一段と深まり、家族の絆がより一層強くなったように思う。
- 夫は自分の母をひどい呆け状態と思っていたが、ホームに行き他の方々の様子を見て、少し見方が変わった。しかし最近ではまた、母の行動が気になる様だ。

5) 家庭・親族関係が気まずくなくなった。

- 夫婦が気まずくなくなった。
- 別居の娘（ショートステイを利用した老人の）がホームへ行き、老人をホームに預けたことをとやかく言った。

Ⅲ ショートステイ利用の満足度

1 家族にとっての評価

ショートステイを利用した結果に対する家族の満足度は極めて高い。ショートステイを利用したことは家族にとって「大いによかった」という回答が79.9%（「まあまあよかった」を合わせると95.7%、表11）、「介護が困難になった時受け入れてくれるところがあり気が楽になった」者が82.0%、「また利用したい」と答えた者が90.6%という高率である。

本人にプラスの変化があった場合や、その結果介護負担が軽減した場合、あるいは本人

もショートステイ・サービスに満足した場合などは、家族にとって「大いによかった」とする回答の比率は一層高い。しかし、マイナス

表11 家族の満足度

（あなたや家族にとってはショートステイを利用したことはよかったですか。）

	人 数	%
大いによかった	111	79.9
まあまあよかった	22	15.8
あまりよくなかった	0	0.0
よくなかった	1	0.7
何ともいえない	3	2.2
無 回 答	2	1.4
計	139	100.0

の変化があったり老人本人は不満足であったケースでも、家族にとっての評価は概ね良好である(表12)。老人本人は不満足であった24ケースすべてが、家族としては「大いに」または「まあまあ」よかったとしている。「介護負担が増えた」と回答したケースですら9ケースすべてが「大いに」または「まあまあ」よかったと答えている。また、介護負担が増

表12 本人の変化・満足度別家族の満足度

	本人の変化・満足度別ケース数	左記ケースのうち、家族が「大いに満足した」ケース
病状		
よくなった	15 [^] (100.0)*	14 [^] (93.3)*
変化なし	71 (100.0)	55 (77.5)
悪くなった	5 (100.0)	1 (20.0)
意欲		
進んで自分でするようになった	17 (100.0)	15 (88.2)
変化なし	110 (100.0)	87 (79.1)
自分からしようとしなくなった	5 (100.0)	5 (100.0)
家族への気持		
家族に協力的になった	14 (100.0)	12 (85.7)
変化なし	115 (100.0)	93 (80.9)
家族に文句が多くなった	4 (100.0)	3 (75.0)
本人の満足度		
満足(大いに、まあまあ)	73 (100.0)	63 (86.3)
不満足(どちらかというといや、もう行きたくない)	24 (100.0)	16 (66.7)
わからない	39 (100.0)	31 (79.5)
介護負担		
減った	15 (100.0)	14 (93.3)
変化なし	95 (100.0)	78 (82.1)
増えた	9 (100.0)	6 (66.7)

注：家族の満足度は「大いに満足した」とそれ以外の2グループ、本人及び介護負担の変化と本人の満足度はプラスの変化があった(または満足した)場合とそれ以外の2グループに分け、2×2クロス表のカイ2乗検定を行った結果、いずれの項目も危険率5%以下(イエーツの修正値)で有意差は認められなかった。

えた9ケース中6ケースが「介護が困難になった時受け入れてくれることがあることがわかり、気が楽になった」と答え、9ケースすべてが「また利用したい」と答えている。

あるケースは、老人が「自分からしようとしなく」なり、「家族に文句が多く」なり、「介護負担が増えた」にもかかわらず、家族にとっては「大いによかった」、「気が楽になった」、「また利用したい」と答えている。また老人が入所中に骨折したケースですら、「また利用したい」と答えている。

これらのことから、後のことや本人の気持ちより、今を何とか切り抜けなければならない切羽詰まった必要性があり、ともかく老人を預かってもらえたことを「よかった」と評価し、再利用を希望している事情を読み取ることができよう。

利用者のほとんどはショートステイの再利用を希望しており、希望していないのは139名中わずか4名であった。そのうち2名は、希望しない理由として、「入所したい時に入れない」、「入所期間が短い」などをあげ、他の1名はその後本人が入院してしまったためである。残る1名は、実母の介護に疲れ、世話していき自信を喪失し、受け入れてくれる病院を探していた娘が、とりあえずショートステイを利用したことで自信を取り戻したケースである。このケースは、「母は現在落ち着いているので、生活環境を変えたくない」との理由をあげている。

2 本人にとっての評価

家族にとってのショートステイの評価は極

表13 本人の満足度

(おとしよりはショートステイ・サービスに満足しましたか。)

	人 数	%
大いに満足した	32	23.0
まあまあ満足した	41	29.5
どちらかといういやだったようだ	22	15.8
もう行きたくないといっている	2	1.4
わからない	39	28.1
無 回 答	3	2.2
計	139	100.0

めて高いが、老人本人にとっての評価は、かなり様相が異なる。回答者である介護者の半数強は、本人も「満足した」とみているものの、「いやだったようだ」とみているケースも少なくない。また痴呆老人が多いため（「徘徊，妄想，便いじりなどの呆け症状がある」老人は、全体の30.9%），本人が「どう思ったかわからない」との回答も多い（表13）。

次に老人本人にとって満足あるいは不満足であった中味を，自由記述の回答（家族が本人から聞いたこと，あるいは家族の判断）からみてみよう。

1) ホームの職員の対応に満足した。(回答数15)

- 自分で動けないのが辛かったが、職員の方々が明るく励まして下さった事が嬉しかった。
- 心遣いも並大ていではなかったと思う。ありがたかった。
- 話しかけてくれるのでよかった。
- 介護が行き届きとてもよかった。

- 職員の対応が良いせいか、家庭内よりも落ち着いているように見える。
- 最初は夕方になると家に帰りたくなかったようだが、そのうちすっかり慣れて、楽しく過ごさせてもらった。お世話下さる方がとてもやさしく、としよりのしたい様にさせて下さり、またよく話しかけて下さったからだと思う。

2) 他の人々との変わりができてよかった。(回答数11)

- 本人は話し好きなので、話し相手が沢山いて楽しかった様だ。
- 家では一日テレビを見て過ごしているので、色々なおとしよりと一緒に嬉しそうだった。
- 家にいると友達もなく一人でぼーっとしているが、同じような年代の人がたくさんいるので話しができ、気分転換になった。
- 普段デイ・サービスに通っているホームであり、顔見知りの方と会えるので喜んでい
- 家では相手をする人が限られているが、ホームではいろいろな人から声をかけてもらえて、喜んでいた。

3) 他の人との関係でいやだった。(回答数15)

- 軽い呆けがあり痴呆老人棟へ入ったが、他の老人の様子を見て、本人は少なからずショックを受けた様だ。
- 本人より呆け状態が進んでいる方々との会話に困った様で、頭がへんになったと言っ

- ていた。
- 他の人がうろうろするので、眠れない夜もあった様だ。
 - ホームの入居者が昼夜大声でふざけるのが気になった。
 - 本人は若い方なので退屈なことが多かった様だ。年の違いから他の人と話が合わないといっている。
 - まわりが老人だけの生活というのが楽しくないように見受けられる。
 - 同室の人にいじめられたので、二度と行くのが嫌だと言っている。
 - 同室者から「何か持って来たか」などと言われ、嫌な思いをしたとのこと。
-

4) 食事と入浴サービスがよかった。(回答数8)

- 食事がおいしくて大変喜んでいた。
 - 食事のほかおやつも出てよかった。
 - 食事や入浴がきちんとできてよかった。
 - 設備の良いお風呂に入れて頂いたことがよかった。家ではなかなか入れない。
-

5) 食事に関して不満があった。(回答数3)

- 食物の好き嫌いがあるため、食べられないものがかなりあった。
 - 家では一品ずつ出して時間をかけて食べているが、ホームでは様子が違うので困った。
-

6) 他人の世話になるのがつらい。(回答数4)

- いろいろな人に世話になり、やってもらうことばかりなので心苦しかった。
 - 身内の者との自然な会話や自然な状態がなくなったことが嫌だったらしい。
 - 人になじめなかった様だ。明治生れの気骨を崩すのがつらかったのでははないかと思う。
 - 我がままが言えず、甘えも控えていたので、早く家に帰りたかった。
-

7) (家にいるように) 思うようにならない。(回答数5)

- お茶が十分飲めなかったこと、好きな甘い物があまり頂けなかったことが嫌だった様だ。家では自分の好きな様にしていたので、ホームの規則正しい生活が窮屈だった様だ。
 - タバコがすえなかった。
 - 自分の要求がなかなかかなえてもらえなかった。
 - いつもそばに誰かいてほしかった。
 - 外出好きな人なので、外に出られないのがつまらなかった。
-

8) 家では出来ないことができた(してもらえた)。(回答数4)

- 自動車以外に連れ出して頂くなど、嬉しいことが多かった。
- 家にいるよりも変化があり、にぎやかだった。
- 運動会の見学が楽しかった。
- 音楽、体操などに積極的に参加するなど、

集団生活の楽しさを味わった。

9) 環境、設備がよい。(回答数6)

- 狭い家の中では歩くことができなかったが、ホームに行き一人で歩けるようになり、元気が出た。
- 広いフロアを自由に歩き廻れた。
- 設備が老人のために作られているため、危険がなく、自由に振舞えたこと。これに触れてはいけない、そこに行ってはだめということがない。
- 周りの環境、建物・設備がよい。

本人がショートステイの生活に満足したか否かということは、家族にとっての満足度どの程度、どの様な影響するであろうか。表14に示すように、本人が満足すれば、家族にとっての評価も高いことは明かである。多くの家族がショートステイ利用に際し、「老人が淋しがるのではないか」、「体調を崩すのではないか」、「他の人に迷惑をかけるのではな

いか」等々、様々な心配をしていることが、回答のはしばしに散見できる。そして、その様なことがなかったことで「安心して預けられる」と高く評価し、再度利用する時に「老人が入所を嫌がらないであろう」と考え、介護者の気持の負担を軽くしている。

しかし、老人本人が不満足であった場合でも、すべてのケースが家族にとっては「大いに」または「まあまあ」よかったとしている。この中には、「としよりはには気の毒だがしかたがない。家族としては大変助かった」というものと、「老人が家の良さを見直した」、「家族の有難みがわかり、感謝の気持ちが出て来て、とても良かった」という2通りの反応が含まれている。

なお後者のようなケースとは対照的に、「ホームでは何でもしてもらえるので本人は嬉しそうだが、家に帰って何もしなくなった」、「家ではホームのようにしてあげられない」とわざわざ記し、老人がホームでの生活に多いに満足したことを素直に喜べない介護者の心境を記したものもあった。

表14 本人の満足度別家族の満足度

		家族の満足度			
		大いによかった	まあまあよかった	よくない 何ともいえない	計
本人の満足度	大いに満足した	31 [^] (96.9)*	1 [^] (3.1)*	0 [^] (0.0)*	32 [^] (100.0)*
	まあまあ満足した	32 (78.0)	9 (22.0)	0 (0.0)	41 (100.0)
	どちらかというとい や、もう行きたくない	16 (66.7)	8 (33.3)	0 (0.0)	24 (100.0)
	わからない	31 (79.4)	4 (10.3)	4 (10.3)	39 (100.0)
計		110 (80.9)	22 (16.2)	4 (2.9)	136 (100.0)

注：無回答を除く

IV ショートステイ利用後の本人の変化及び満足度の背景

前章までは、ショートステイ利用によって、本人及び家族に、どのような変化があったのか、どのようなことに満足あるいは不満足であったのかについて考察した。この章と次の章では、それらの変化や満足度は、本人及び家族のどのような事情とどう関係しているのかを分析する。

1 病状の変化とその他の変化

ショートステイ利用前と比べ、病状が「よくなってもどってきた」ケースが15名、「悪くなってもどってきた」ケースが5名存在している。病状変化とその他の心身の変化との関係を分析すると、病状が好転したケースで、プラスの変化があった者の比率が高い(表15)。病状の悪化したケースは少ないので、マイナスの変化との関係を見出すには至らなかった

が、サービスへの不満との関係は無視できない。ショートステイ・サービスに不満足であった者は、全体では139名中24名(17.2%)であるのに対し、病状が悪化したケースでは、5名中3名と高率である。

病状変化は、原因が何であれ、これから分析する心身の変化及び満足度を左右する重要な要因である。

2 本人の属性・性格と変化及び満足度

本人の性、年齢、身体、精神的障害の有無、日常生活動作能力、性格をとりあげ、ショートステイ利用後の変化及び満足度との関係をみた。なお変化については、統計的にはプラスの変化のみとりあげ、マイナスの変化があったケースについては数が少ないので事例検討を行った。

表15 本人の病状の変化別その他の変化

	病 状 の 変 化		有 意 差*
	よ くな っ た	変 化 な し も と も と 問 題 な し 悪 くな っ た	
病状の変化別ケース数	15 [^] (100.0)%	115 [^] (100.0)%	
上記ケースのうち			
顔つやがよくなったケース	12 (80.0)	22 (19.1)	○
排泄の自立・訴えが好転したケース	7 (46.7)	6 (5.2)	○
進んで自分でするようになったケース	7 (46.7)	10 (8.7)	○
家族に協力的になったケース	4 (26.7)	10 (8.7)	
よく話をするようになったケース	7 (46.7)	15 (13.0)	○

注* 病状の変化は「よくなった」とそれ以外の2グループに、変化及び満足度はプラスの変化があった(または満足した)場合とそれ以外の2グループに分け、2×2クロス表のカイ2乗検定を行った。○印は危険率5%以下(イエーツの修正値)で有意差があることを示す。

表16は、プラスの変化の有無及び満足度の性による違いを示している。精神的な面でのプラスの変化があったものは、女性より男性の方が比率が高い。家庭で我がママが言える立場にある場合ほど、精神的な面でプラスの変化が生ずる傾向があることについては後ほど述べるが、女性より男性の方がそのような立場にある者が多いためかもしれない（女性は嫁に介護されるケースが多いのに対し、男性は配偶者に介護されるケースが多い）。

年齢別では、一定の傾向を見出すことができなかった。

身体・精神的障害（視力障害、聴力障害、言語障害、意志疎通が悪い、ひどい呆け症状、尿・便失禁）の有無及び日常生活動作能力レベル別にも分析してみたが、ショートステイ利用後の変化については一定の傾向が見出せなかった。また、ショートステイ・サービスの満足度に関しては、言語障害、尿・便失禁、呆け症状などがあるケース、意志疎通が悪いケース、あるいは日常生活動作能力レベルが

低いケースでは、「満足したかどうかわからない」とする回答の比率が有意に高いけれども、満足が不満足かの差はほとんどみられなかった。

次に本人の性格との関係についてみてみよう（この性格は、介護者の主観的な判断による）。ショートステイ利用後の変化については一定の傾向が見出せなかったが、サービスの満足度については、表17のような結果が得られた。社交性の乏しい老人、あるいは「自尊心が強い」、「自分勝手」、「がんこ」など自分の枠を守ろうとする老人は、そうでない人と比べショートステイが満足であった者の比率が低い。

ショートステイの利用は、普段は身内の限られた人としか接していない老人が、多くの他人の居る中に入ることを意味している。このことが、人によっては楽しいことであり、他の人にとっては辛いことであるのは、先にみたとおりであるが、その違いは老人の性格によると考えられる。

表16 本人の性別変化及び満足度

	性 別		有 意 差*
	男	女	
性別 ケース数	50^(100.0)%	86^(100.0)%	
上記ケースのうち			○
顔つやがよくなったケース	14 (28.0)	21 (24.4)	
病状がよくなったケース	6 (12.0)	9 (10.5)	
進んで自分でするようになったケース	10 (20.0)	6 (7.0)	
家族に協力的になったケース	6 (12.0)	7 (8.1)	
よく話をするようになったケース	10 (20.0)	11 (12.8)	
ショートステイ・サービスに満足したケース	29 (58.0)	41 (47.7)	
ショートステイ・サービスに不満足であったケース	6 (12.0)	18 (20.9)	

注* 表15の注参照

表17 本人の性格別変化及び満足度

	性格別ケース数	左記ケースのうち、ショートステイ・サービスに		有意差*	
		満足したケース	不満足であったケース		
本人	ものわかりがよい	21 [^] (100.0)%	15 [^] (71.4)%	4 [^] (19.0)%	
	が ん こ	57 (100.0)	27 (47.4)	10 (17.5)	
の	協 調 的	19 (100.0)	12 (63.2)	3 (15.8)	
	自 分 勝 手	54 (100.0)	28 (51.9)	9 (16.7)	
性	自分でやろうとする	33 (100.0)	18 (54.5)	8 (24.2)	
	人に頼ろうとする	47 (100.0)	21 (44.7)	9 (19.1)	
格	人にうちとけやすい	33 (100.0)	24 (72.7)	4 (12.1)	○
	人になれない	38 (100.0)	15 (39.5)	11 (28.9)	
格	腰が低い	26 (100.0)	17 (65.4)	3 (11.5)	
	自尊心が強い	47 (100.0)	25 (53.2)	11 (23.4)	

注* 性格については各項目「どちらともいえず」及び無回答を除き対照的な2つのグループをとり出し、満足度については「わからない」及び無回答を除き満足と不満足との2つのグループをとり出し、2×2クロス表のカイ2乗検定を行った。○印は危険率5%以下（イエーツの修正値）で有意差があることを示す。

事例2 ショートステイ利用後、外に目が向くようになり自主性が出て来たNさん

Nさん（79歳、女性）は、お嬢様育ちで、若い頃より社交性が乏しく、依存的な性格であった。友人との交わりもなく、優しい長男の嫁を頼り切っていた。3年前に失禁が始まり、拒食状態となり肺炎を起して4か月入院。その後Nさんはすっかり依存的となり、自分からは何もしようとしなくなつてしまった。嫁は一生懸命Nさんの世話をしているが、世話をすればするだけNさんが依存的となり、またNさんの目が自分だけに注がれることが重圧となっていた。Nさんに呆け症状が出て来たことも気になって、嫁は思い切ってデイ・サービスを申請した。

デイ・サービスに通いはじめた当初、Nさんは緊張気味であったが、次第に雰囲気慣れ、レクリエーション活動にも興味を示し、参加するようになった。

Nさんがデイ・サービスに通いはじめて9か月経過した頃、法事のため、家族は初めてショートステイの申請をした。本人は入所を躊躇し、長男と嫁も心配したが、ホームの職員が本人と家族を励まし、思い切って入所することとなった。ところが実際に入所してみると、Nさんは同室の老人と話がはずみ、手紙を書いて寮母と一緒に外へ投函しに行ったり、デイ・サービス参加日には居室からいそいそとデイ・サービスの部屋に赴くなど、楽しく過ごすことが出来た。

Nさんは、デイ・サービスへの参加やショートステイの利用によって家の外へ関心が広がり、家では、外での経験を家族に語るようになった。そのようなNさんの変化で、嫁は以前のような重圧感がなくなり、大変気が楽になったという。その後嫁は、ショートステイを利用し、夫の海外出張に同行したり、懸案の墓参りをすることができるようになった。

3 家族の中での本人の位置と変化及び満足度

ショートステイ利用の評価や精神面の変化は、老人が日頃家庭でどのような介護を受けているかということとも関係しているように思われる。そこで、家族形態、介護者と本人の続柄及び介護者の介護意欲と、本人の満足度及び精神面の変化との関係を分析した(表18, 19)。

家族形態別にみると、数は少ないが片親と無配偶子のみの世帯において、精神面でプラ

スの変化があった者、そしてショートステイ・サービスに不満足であった者の比率が高い。無配偶子の子供だけで他に誰もいない暮らしは、老人にとって気がねがなく、我がままも出やすいであろう。それだけにショートステイ先で他人の世話を受けるのがつらいけれども、他人の世話を受けたこと、一時的にでも子供との間に距離がとれたことが、老人の気持ちにプラスの変化をもたらすこともあると考えられる。

これと対照的に、家庭では気がねがあるケースが多いと思われる、配偶者と死別し既婚

表18 家族形態・介護者の続柄・介護者の介護意欲別本人の変化及び満足度

	家族形態		介護者の続柄		介護者の介護意欲	
	片親と無配偶の子のみ	片親と既婚子家族	実子	嫁	世話したい	できものなら世話したくない
家族形態・続柄・介護意欲別ケース数	9 [^] (100.0)%	72 [^] (100.0)%	42 [^] (100.0)%	53 [^] (100.0)%	20 [^] (100.0)%	20 [^] (100.0)%
上記ケースのうち						
進んで自分でするようになったケース	4 (44.4)	3 (4.2)	7 (16.7)	5 (9.4)	1 (5.0)	4 (20.0)
家族に協力的になったケース	2 (22.2)	5 (6.9)	7 (16.7)	5 (9.4)	2 (10.0)	0 (0.0)
よく話をするようになったケース	3 (33.3)	10 (13.9)	8 (19.0)	7 (13.2)	4 (20.0)	1 (5.0)
ショートステイ・サービスに満足したケース	4 (44.4)	37 (51.4)	19 (45.2)	29 (54.7)	7 (35.0)	13 (65.0)
ショートステイ・サービスに不満足であったケース	3 (33.3)	14 (19.4)	10 (23.8)	9 (17.0)	2 (10.0)	3 (15.0)

注：「進んで自分でするようになった」か否かについて、家族形態別の表中の2つのグループの間で有意差がみられた。検定の方法は表15と同じ。

表19 家族形態別本人の意欲の変化

	進んで自分でするようになった	自分からしようとしなくなった	変りない	計
夫婦のみ	3 [^] (15.0)%	1 [^] (5.0)%	16 [^] (80.0)%	20 [^] (100.0)%
夫婦と無配偶子のみ	0 (0.0)	1 (14.3)	6 (85.7)	7 (100.0)
夫婦と既婚子家族同居	4 (25.0)	1 (6.3)	11 (68.7)	16 (100.0)
片親と既婚子家族同居	3 (4.3)	2 (2.9)	64 (92.8)	69 (100.0)
片親と無配偶子のみ	4 (50.0)	0 (0.0)	4 (50.0)	8 (100.0)
その他	2 (18.2)	0 (0.0)	9 (81.8)	11 (100.0)
計	16 (12.2)	5 (3.8)	110 (84.0)	131 (100.0)

注：無回答を除く。

子家族と同居している老人の場合、プラスの変化があった者の比率は低い。また、介護者の続柄のうち、実子と嫁の場合を取り出し比較してみたところ、それほど大きな差ではないが、後者の方がプラスの変化があった者の比率が低い。

マイナスの変化については数が少ないので統計的な分析は難しいが、ショートステイ利用後「家族に文句が多くなった」のは4名で、そのすべてがショートステイ・サービスに満足している。また「自分からしようとしなくなった」者5名のうち3名がサービスに満足しており、不満な者はいない（残る2名は「わからない」）。さらに、ショートステイ・サービスに満足した者の比率は、介護者が「世話したい」と回答したケースと比べ、「できるものなら世話をしたくない」と回答したケースの方が高いことと考えあわせると、家庭よりホームにいる時の方がよく、ホームでは依存的になったり、帰宅後家族に不満を持つ老人もいることがわかる。

4 ショートステイ利用についての本人の納得度と変化及び満足度

ショートステイの利用を本人が事前にどのように受け止めていたかということも、ショートステイ利用の満足度や精神面の変化に影響すると思われる。

本人の受け止め方としては、消極的納得（「家族が説明してからは、自分で納得して利用」）と呆け等で理解していない（「よく理解していなかったがあまり抵抗もしなかった」、「どう思っていたかわからない」）のがほとんどで、本人自ら積極的に利用したいという気持があったり、逆に抵抗があった（「家族が説得してやっとサービスを受けることになった」、「本人には本当のことを言わずにつれて行った」）のは小数である。この小数のケースに着目してみよう（表20, 21, 22）。

本人がショートステイ利用に積極的であった者は、全員がショートステイ・サービスに満足している。そして11名中2名が、ショートステイ利用後「家族に文句が多くなった」としている（「家族に文句が多くなった」の

表20 ショートステイ利用前の気持別本人の満足度

	大満足した	まあまあ満足した	いやなようだ	わからない	計
自分から積極的に利用したいという気持をもっていた	4 [^] (33.3) [^] %	8 [^] (66.7) [^] %	0 [^] (0.0) [^] %	0 [^] (0.0) [^] %	12 [^] (100.0) [^] %
家族が説明してからは、自分で納得して利用した	11 (25.0)	17 (38.7)	10 (22.7)	6 (13.6)	44 (100.0)
家族が説得してやっとサービスを受けることになった	3 (23.1)	4 (30.8)	4 (30.8)	2 (15.4)	13 (100.0)
本人には本当のことを言わずにつれていった	1 (14.3)	2 (28.6)	1 (14.3)	3 (42.8)	7 (100.0)
本人は理解していない どう思っていたかわからない	11 (20.0)	10 (18.2)	9 (16.4)	25 (45.4)	55 (100.0)
計	30 (22.9)	41 (31.3)	24 (18.3)	36 (27.5)	131 (100.0)

注：無回答を除く

表21 ショートステイ利用前の気持別本人の変化 (家族への気持)

	家族に協力的 になった	家族に文句が 多くなった	変わらない	計
自分から積極的に利用したいという気持をもっていた	3 [^] (27.3)%	2 [^] (18.2)%	6 [^] (54.5)%	11 [^] (100.0)%
家族が説明してからは自分で納得して利用した	3 (7.0)	1 (2.3)	39 (90.7)	43 (100.0)
家族が説得してやっとサービスを受けることになった	3 (23.1)	0 (0.0)	10 (76.9)	13 (100.0)
本人には本当のことを言わずにつれていった	2 (28.6)	0 (0.0)	5 (71.4)	7 (100.0)
本人は理解していない, どう思っていたかわからない	3 (5.7)	1 (1.9)	49 (92.4)	53 (100.0)
計	14 (11.0)	4 (3.1)	109 (85.9)	127 (100.0)

注: 無回答を除く

表22 ショートステイ利用前の気持別本人の変化 (意欲)

	進んで自分で するようになった	自分からしよう としなくなった	変わらない	計
自分から積極的に利用したいという気持をもっていた	2 [^] (18.2)%	1 [^] (9.1)%	8 [^] (72.7)%	11 [^] (100.0)%
家族が説明してからは自分で納得して利用した	3 (7.1)	2 (4.8)	37 (88.1)	42 (100.0)
家族が説得してやっとサービスを受けることになった	3 (23.1)	1 (7.7)	9 (69.2)	13 (100.0)
本人には本当のことを言わずにつれていった	2 (28.6)	1 (14.3)	4 (57.1)	7 (100.0)
本人は理解していない, どう思っていたかわからない	7 (13.2)	0 (0.0)	46 (86.8)	53 (100.0)
計	17 (13.5)	5 (4.0)	104 (82.5)	126 (100.0)

注: 無回答を除く

は全体では139名中4名にすぎない)。ショートステイ利用に積極的な老人の中には、家よりむしろホームでの生活を快適に感じ、家に帰ってから不満を一層募らせるケースもあることがわかる。

本人に抵抗感があったり、本当のことを言わずにつれて行った場合はどうであろうか。

本人が納得しないまま病院に入院させると、病院生活への適応が困難で精神的・身体的ダメージを引き起こしやすいと言われている。ショートステイの場合でも同様のことが言えるのではないかと予測したのであるが、今回の調査結果では、「家族が説得してやっと」

の場合も、「本当のことを言わずにつれて行った」場合もともに、ショートステイ利用によるマイナスの変化や不満との相関は認められなかった。両者ともむしろ「家族に協力的になった」、「進んで自分でするようになった」というプラスの変化があった者の比率は高めである。このことは、ショートステイの利用について本人の抵抗があったというそのことより、抵抗があっても利用できるような家族関係に着目する必要を示唆しているように思われる。

「本当のことを言わずにつれて行った」のは、未婚子が片親を介護しているケース、

「説得してやっ」とは妻（夫）が夫（妻）を介護している夫婦のみの世帯が相対的に多いことから推測されるように、本人と介護者がお互いに本音を出しやすい関係にあるケースと思われる。そのため、本人は抵抗の意思表示をすることが出来、また不承不承入所することになっても、見離されることはないという安心感があるものと考えられる。このことを裏返せば、本人が納得していないために、家族としてはショートステイを利用したくて

も利用できない場合や、逆に本人は抵抗の意思表示をすることが出来ない場合も多々あるのではないと思われる。

むしろ、「本当のことを言わずにつれて行く」ことに問題がない訳ではない。個々のケースにあたってみると、本人にとって訳のわからぬままの入所が、一種の精神錯乱を引き起こし、ホームに適応できなかったケースもある。また他方では、「家族が説明して納得して利用した」ケースでも、頼りにしてい

事例3 本人の拒否でショートステイが利用できなかった例

76歳のEさん（女性）は2年前頃より同じことをくりかえし、タンスの物を入れたり出したりで部屋の中はごちゃごちゃであった。しかしこの2年は夫の世話で何とか過ごしていたが、その夫が脳梗塞で死亡し、養子の嫁であるYさんが全面的に面倒を見ることになった。しかし夜になると亡夫の遺影に話しかけたりするEさんを、Yさんやその子供達は不快がった。Yさん自身自律神経失調症で病院通いをする事となり、介護に疲れはててショートステイを申請した。

調査訪問に行って話を聞いてみると、嫁は介護の大変さを続けざまに語る。話のとぎれたところで、「じゃEさん、一度私達の所でゆっくりしませんか」と問うと、「私はどこも悪い所はないのだから、そんなに疲れているのなら、あなた（Yさんのこと）がそちらに行けばいいんじゃないですか」と、我関せずといった風で入所をかたくなに拒否する。

こんな状況のEさんを無理して入所させることは難しい。「Yさんの大変さはよくわかるけど、ショートステイ入所はちょっと無理ですね」と伝えると、嫁はすっかり意気消沈してしまった。とりあえず、デイ・サービスに結びつけ、施設の雰囲気慣れてもらうことが先決のケースのようだ。

ショートステイは病院の入院とは違って、家族側の都合で利用されるものであるだけに、老人を預かる側では、かえって老人の気持に気を配らなければならない。本人がいやがっても家族にとってショートステイの利用が必要と思われる時には、本人の気持を和らげ、安心して来てもらえるよう働きかけるが、Eさんのようにまだら呆けの場合は、納得してもらうのは大変難しい。

た介護者が病気で入院し、本人は大きな不安を抱いていたり、本人が家族から見捨てられるのではないかという不安を抱いているケースで、入所後病状悪化や意欲の低下などのデメリットを生じたケースがある。

これらの事例は、ショートステイ利用についての本人の気持ちを無視してよいということではなく、不安の有無などを含め、もっとつっ込んだ分析の必要性を示していると思われる。

事例4 わけのわからないままに入所することとなり、ホームに適應できなかったFさん

Fさん（68歳、女性）は次男（36歳）と同居している。6年前頃から物忘れが始まった。夫は4年前に急性心不全で死亡している。その後も意志の疎通が不十分であることのほか、とりたてて問題もなく生活していたが、今年1～2月頃より奇異な行動が目立ってきた。たとえば、空き缶やゴミ類を捨ってくる。真夏でも亡父の冬ズボン、オーバーを着て歩く。食べ物があれば全部食べ下痢をする。赤信号を無視して横断する。昼夜を問わず近所周辺を徘徊するなどである。こんなFさんの行動を近所の住民達は問題視し、民生委員は同居の次男に「このまま放置することは問題ではないか」と、ホーム入所か入院をと勧めた。しかし次男としてはどうすることもできず、そのままになっていた。

そんなFさんと次男の姿にたまりかねた民生委員は地区担当の保健婦に相談し、保健婦と民生委員がFさん宅を訪問し次男と話し合い、緊急ショートステイ入所を決めた。

翌日Fさんは次男に付き添われ入所してきた。8か月以上入浴もしていなかったため全身の汚れがめだつ。Fさんは、入浴と散髪でこざっぱりしたあと、居室に案内された。しかし落ちつかず、夕方「家に帰らなければならない」と出口をさがす。夜勤寮母が気付いた時はすでにベランダ伝いに出てゆき、行方不明となっていた。警察に保護願いを出していたところ、6時間後の22時、隣市の警察より保護しているとの連絡があり、職員一同ほっとする。その翌々の朝も再び出口を探し、2階非常口のベランダから柵を乗り越え1階中庭に転倒しているところを発見。全身打撲で骨折はなかったが、38℃の熱が出たため緊急入院した。発熱は肺炎、脱水症、尿閉のためであった。

Fさんは1カ月の入院の後自宅に戻り、元のような生活を続けている。

Fさんの行動や生活のし方は、第三者から見ると奇異であっても、自分ではそれが通常であるわけで、Fさんとしては入所させられるのは何故なのかがわからない。そして突然生活環境が変わったことによる不安、ストレスが、我々が想像する以上に大きかったものと思われる。

事例5 不安と緊張から病状が悪化したOさん

Oさん（女性）は、娘夫婦と孫2人の5人で暮らしている。10年来、脳血栓による右半身麻痺があり、歩行不能である。物静かで自発性に乏しく、身の回り一切を娘に委ね、手厚い世話を受けている。身体上の問題といえば、便秘がちということ位であった。

かつて保健婦の勧めでデイ・サービスを利用したことがあるが、Oさんは人前に出るだけで緊張し、そのあと2～3日疲労が続くため、デイ・サービス参加は中止された。

今回の2か月予定のショートステイ利用は、介護者である娘が風邪をこじらせ肺炎を併発し、主治医より静養を命ぜられたためである。入所してからのOさんは緊張した面持ちである。自発的な言葉はほとんどない。食事はきざみ食であるが摂取量が少ない。日中はうとうとし、夜になると大声をあげたりする。便秘がちであったのに、入所してからずっと不消化下痢便が続いている。そして1週間経過した頃より、微熱が出はじめた。その後しばらくショートステイで経過をみていたが、不消化下痢便と微熱が続くので、某病院と連絡をとり、家族の了解のもとに入院を依頼した。

Oさんにとって、頼り切っていた娘が病気であること、長年気がねなく手厚い介護を受けていたのに他人の世話を受けることになったこと、人みしりする性格で他人の中に入って行くことなどは、大きな不安と緊張の連続を意味しており、それが病状悪化につながったといえよう。

5 ショートステイの利用経験の有無と変化及び満足度

本人がショートステイの利用経験があったり、ショートステイ先の施設の様子が予めわかっていたら、それだけショートステイ利用への抵抗感や緊張感が少ないと考えられる。そこで、そのことがショートステイ利用による変化や満足度に影響しているか否かについて分析した。

表23に示すように、過去にもショートステイを利用した経験がある者の方が、はじめて利用した者より、身体面でプラスの変化があった者、及びサービスに満足した者の比率が高い。前回の利用で、本人にとってはショ-

ートステイがどういうものか様子がわかっている安心感があること、家族やホームの職員にとっては前の経験をふまえた配慮ができることが、プラスに作用したものと見えよう。それに加えて、そもそもマイナスの変化や不満が出にくい人が再利用している、ということも考えられる。

ところが、今回のショートステイ先のホームが提供する諸サービス（デイ・サービスなど）の利用経験の有無別にみると、上記とは逆に、今回のショートステイが当施設のサービスを受けた初めての経験である者の方が、老人の心身にプラスの変化があった者及びサービスに満足した者の比率が高い。そのことは、当施設のサービスを利用したことがあり、

表23 サービスの利用経験別本人の変化及び満足度

	ショートステイの利用経験			当施設のサービスの利用経験		
	今回がはじめて	以前にも利用	有意差*	今回がはじめて	利用したことがある	有意差*
サービスの利用経験別 ケース数	66 [^] (100.0)%	73 [^] (100.0)%		74 [^] (100.0)%	64 [^] (100.0)%	
上記ケースのうち						
顔つやがよくなったケース	11 (16.7)	25 (34.2)	○	24 (32.4)	12 (18.8)	
病状がよくなったケース	6 (9.1)	9 (12.3)		13 (17.6)	2 (3.1)	○
進んで自分でするようになったケース	8 (12.1)	9 (12.3)		12 (16.2)	5 (7.8)	
家族に協力的になったケース	6 (19.1)	8 (11.0)		9 (12.2)	5 (7.8)	
よく話をするようになったケース	9 (13.6)	13 (17.8)		12 (16.2)	10 (15.6)	
ショートステイ・サービスに満足したケース	31 (47.0)	42 (57.5)		43 (58.1)	30 (46.9)	
ショートステイ・サービスに不満足であったケース	16 (24.2)	8 (11.0)		9 (12.2)	15 (23.4)	

注* 表15の注参照

表24 デイ・サービスの利用経験別本人の変化及び満足度

	デイ・サービスの利用経験		
	あり	なし	有意差*
サービスの利用経験別ケース数	80 [^] (100.0)%	53 [^] (100.0)%	
上記ケースのうち			
進んで自分でするようになったケース	4 (5.0)	11 (20.8)	○
ショートステイ・サービスに満足したケース	40 (50.0)	29 (54.7)	
ショートステイ・サービスに不満足であったケース	19 (23.8)	5 (9.4)	

注* 表15の注参照

当施設になじんでいるということは、サービス利用に際し老人の抵抗感を減らす上で大いに効果があるとしても、利用結果に関してはそれほど問題ではないことを示しているように見える。そして、はじめて当施設のサービスを利用したケースでは、ホームの職員の働きかけによる改善の余地が残っていたり、介護者がショートステイ利用による小さな変化をも、敏感に感じとるのかもしれない。

そこで、デイ・サービス（他の施設のデイ・サービスも含む）の利用経験の有無別にみ

たところ（表24）、デイ・サービスを利用したことがない者の方が、「進んで自分でするようになった」との回答の比率が有意に高かった。デイ・サービス利用者の場合、精神・身体状態の改善はすでにデイ・サービスによって図られているといえよう。なお、ショートステイ・サービスを不満に思う老人の比率は、デイ・サービス利用者の方が高い。デイ・サービスでは顔なじみの人達と楽しく過ごしており、それとの対比でショートステイに不満を持つ老人もいるようである。

事例6 日常生活動作能力拡大の可能性がありながら、ショートステイ利用まで、本人も家族もそのことに気付いていなかった例

夫と死別し娘と同居しているTさん(81歳)は、若い頃から病弱であった。12年前に卵巣ヘルニアと胆石の手術を受け、その1年後、歩行練習中に右大腿骨頸部骨折をした。再度手術を受けさせるのはかわいそうとの娘の考えで、保存治療のみとし、Tさんは歩行ができなくなった。

Tさんは、好きな編物をしたり、新聞を読んだりといった生活を送っていたが、6年前、娘が病気で介護が出来なくなった折老人病院に入院して以来、すっかり寝たきりとなってしまった。加えて昨年、話し相手の友人の死ですっかり気落ちし、機能低下が著しく、おむつを使用する状態となった。

このような状態の時、娘が結婚式に出席するため、1泊2日のショートステイの申請が行われた。娘は、本人が多くの人の中に入るのを好まない性格であることを非常に心配したため、寮母室前の個室を使う、娘のいるうちに入浴するなどの配慮をした。翌日迎えに来た娘は、「心配していた事がうそのようだ。今度何かあった時にまた頼みたい」といって帰宅した。

その後、1か月もたたないうちに娘が右上腕部を骨折し、再度ショートステイを利用することになった。Tさんはホームにも慣れ、また今回の入所は長くなりそうなので、日常生活動作拡大を試みることにした。初日はおむつ使用、2日目よりトレーニング・パンツを使い、3日目に差し込み便器介助をする。6日目に自力で差し込み便器を使うことができた。12日目にはポータブルトイレを使用し、食事時間以外も車椅子で離床し、他の老人と会話する時間が多くなった。

ショートステイ利用日数は、当初の予定では27日間であったが、娘の回復が遅れ、2週間延期が認められた。そのことも幸し、退所1週間前には、自分で車椅子を動かすこともできるようになった。そして約1か月半の入所を終え、Tさんも娘夫婦もなごやかな笑顔で帰宅していた。

このケースは、介護者と本人の「年だから」、「性格だから」という思い込みからくる、過保護で、人との交わりのない老人の生活が、ショートステイの利用を契機に変化した例である。

V ショートステイ利用後の家族の変化及び満足度の背景

1 介護負担の変化の背景

ショートステイを利用した後、老人の精神・身体状況の変化により、その後の家庭での介護負担に変化があったケースはそれほど多くはないが、ここではその数少ないケースについて、負担減あるいは増をもたらしたものは何かについて分析する。

は何かについて分析する。

表25は、本人の変化との関係を示している。家族への気持、意欲、排泄の訴えや自立についてのプラスの変化が介護負担減に、病状の悪化、意欲の低下が介護負担増に結びつく度合いが高いことがわかる。

次に、介護負担の減少と、介護者の属性(性、

表25 本人の変化別介護負担の変化

	介 護 負 担			
	減 っ た	増 え た	変 化 な し	計
顔 っ や				
よ く な っ た	8 [^] (23.5)%	0 [^] (0.0)%	26 [^] (76.5)%	34 [^] (100.0)%
悪 く な っ た	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
変化なし、もともと問題なし	6 (7.3)	8 (9.8)	68 (82.9)	82 (100.0)
排泄の訴え・自立				
よ く な っ た	6 (46.2)	0 (0.0)	7 (53.8)	13 (100.0)
悪 く な っ た	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	1 (100.0)
変化なし、もともと問題なし	9 (8.7)	9 (8.7)	85 (82.6)	103 (100.0)
病 状				
よ く な っ た	4 (28.6)	0 (0.0)	10 (71.4)	14 (100.0)
悪 く な っ た	0 (0.0)	4 (100.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
変化なし、もともと問題なし	10 (10.2)	5 (5.1)	83 (84.7)	98 (100.0)
意 欲				
進んで自分でするようになった	6 (40.0)	0 (0.0)	9 (60.0)	15 (100.0)
自分からしようとしなくなった	0 (0.0)	3 (75.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
変化なし	8 (8.1)	6 (6.1)	85 (85.8)	99 (100.0)
家族への気持				
家族に協力的になった	8 (61.5)	1 (7.7)	4 (30.8)	13 (100.0)
家族に文句が多くなった	1 (25.0)	2 (50.0)	1 (25.0)	4 (100.0)
変化なし	6 (5.9)	6 (5.9)	90 (88.2)	102 (100.0)
会 話				
よく話をするようになった	9 (42.9)	0 (0.0)	12 (57.1)	21 (100.0)
変化なし	6 (6.1)	9 (9.2)	83 (84.7)	98 (100.0)

注1 無回答を除く

注2 本人の変化については、「よくなった」とその他の2グループ、介護負担については「減った」とその他の2グループにわけ、各々2×2クロス表のカイ2乗検定を行った結果、すべての場合に危険率5%以下(イエーツの修正値)で有意差があった。

表26 介護者・家族の状況別介護負担の変化

	介護者・家族の状況別 ケース数	左記ケースのうち、介 護負担が減ったケース	有意差*
介護者の続柄 実子 その他	42 [^] (100.0) [%] 98 (100.0)	7 [^] (16.7) [%] 8 (8.2)	
家族形態 片親と無配偶子のみ 片親と既婚子家族	9 (100.0) 72 (100.0)	4 (44.4) 2 (2.8)	○
世帯人数 2人(本人と介護者のみ) 3人以上	29 (100.0) 105 (100.0)	7 (24.1) 6 (5.7)	○
同居年数 20年以上 20年未満	78 (100.0) 51 (100.0)	3 (15.0) 0 (0.0)	
介護意欲 世話をしたい できることなら世話をしたくない	20 (100.0) 20 (100.0)	10 (12.8) 3 (5.9)	

注* 表15の注参照

年齢、健康状態、職業の有無)、家族の状況、介護者と本人との関係について分析した結果、介護者の属性に関しては一定の傾向は見出せさなかったが、家族の状況及び介護者と本人との関係については、次のような傾向がみられた。すなわち、介護負担が減少したケースの比率が高いのは、「介護者が実子」、「片親と無配偶子のみ世帯」、「本人と介護者のみの2人世帯」、「介護者と本人の同居期間が長い」、「介護者の介護意欲が高い」場合である(表26)。これらの特徴を持った家庭では老人にとって気がねが少ないと考えられるが、そのような場合にショートステイ利用後、本人に精神面のプラスの変化が生じやすいことは、先に述べた通りである。そして介護者もまた、そのことを介護負担が減ったとして評価しているといえるだろう。

介護負担の増加と、介護者の属性や家族の

状況などとの関係については、ケースが少ないので統計的な分析で傾向をつかむことはできないが、個々のケースを検討すると、もともとあった老人と介護者の間の葛藤を反映している場合が多いようである。

2 介護者の老人を見る目及び家族関係の変化の背景

「ショートステイを利用したことにより、老人をお世話する気持ちに変化がありましたか」という問いに対し、「老人を今までと違った目で見られるようになり、老人を受け止めやすくなった」と回答したのは、133名中25名(18.8%)であるが、このような老人を見る目の変化があったことと、介護者の属性、家族の状況、介護者と本人の関係について分析した(表27)。

差があるとは断定できないものの、介護者

表27 介護者・家族の状況別介護者の老人を見る目の変化

	介護者・家族の状況別ケース数	左記ケースのうち、老人を違った目でみられるようになったケース
介護者の性別		
男	18 [^] (100.0) [%]	0 [^] (0.0) [%]
女	121 (100.0)	25 (20.7)
介護者の年齢		
50歳未満	52 (100.0)	11 (26.2)
50歳以上	97 (100.0)	14 (14.4)
介護者の続柄		
実子	42 (100.0)	7 (17.1)
嫁	53 (100.0)	13 (24.5)
家族形態		
片親と無配偶者のみ	9 (100.0)	4 (44.4)
その他	129 (100.0)	21 (16.3)
世帯人数		
2人(本人と介護者のみ)	29 (100.0)	7 (24.0)
3人以上	105 (100.0)	18 (17.1)
同居の時期		
結婚後同居	59 (100.0)	12 (20.3)
別居の後同居	51 (100.0)	7 (13.7)
介護意欲		
世話したい	20 (100.0)	5 (25.0)
できるものなら世話したくない	20 (100.0)	2 (10.0)

注：表15と同様の検定で有意差の認められた項目はない。

が男より女、高齢者より中年、実子より嫁である場合に、変化のあった者の比率が高い。これらの介護者にとって、毎日顔を合せていた老人から一時離れ、自分の気持ちを振り返る時間が持てることや、ホームの職員の老人への対応を見たり助言を得ることなどが、老人の見方を変えさせ、老人介護への前向きな姿

勢を生み出すのではないと思われる。

他方「片親と無配偶者のみ」、「本人と介護者のみの2人世帯」で、また「世話をしたくない」より「世話をしたい」介護者において、老人を見る目に変化のあった者の比率が高い。これらの場合には、老人の側での精神面のプラスの変化がみられることが多いことは、先にみたとおりである。老人と介護者の密着度が高い場合それだけ葛藤も大きく、一時離れることが、お互いにいたわりと感謝の気持ち呼び戻すことになるものと思われる。

次に、ショートステイを利用して「家族関係がよくなった」と答えたのは、134名中22名(16.4%)である。「家族関係がよくなった」中味についての自由回答(前述)には、老人と介護者あるいは老人と他の家族の関係の改善に言及したものもかなりあったが、統計的にみても、本人の精神面でのプラスの変化、介護負担の減少、介護者の老人を見る目の変化があった場合は、家族関係がよくなったケースの比率が高い傾向がみられた(表28)。

「家族関係が前より悪くなった」ケースは少ないので統計的な分析は不可能であるが、個々のケースをみてみると、以前から介護責任や財産問題をめぐり家族や親族の間に葛藤があって、ショートステイ利用を契機にそれが悪化あるいは顕在化したものとみることができる。

表28 本人・家族の変化別家族関係の変化

	本人・家族の変化別 ケース数	左記ケースのうち、家族 関係がよくなったケース	有意差*
意欲 進んで自分でするようになった 変化なし 自分でしようとしなくなった	17 [^] (100.0)% 115 (100.0)	4 [^] (23.5)% 16 (13.9)	
家族への気持 家族に協力的になった 変化なし 家族に文句が多くなった	14 (100.0) 119 (100.0)	6 (42.9) 14 (11.8)	○
会話 よく話をするようになった 変化なし	22 (100.0) 111 (100.0)	9 (40.9) 11 (9.9)	○
介護負担 減った 変化なし 増えた	15 (100.0) 104 (100.0)	6 (40.0) 14 (13.5)	
老人を今までと違った目でみられるようになった はい はい	22 (100.0) 117 (100.0)	7 (31.8) 18 (15.4)	

注* 表15の注参照

事例7 ショートステイ利用により、夫を世話する視点が見えるようになったIさんの妻

Iさん(69歳)は、これといった趣味もなく、ひたすら仕事に打ち込み、67才で定年を迎えて以来、家で妻と2人きりの生活を送っていた。まもなく呆け症状が現れ、外出して帰る場所がわからなくなり、警察に保護されることが、たびたび起るようになった。

妻はどうしてよいかわからず、市役所へ相談に行きK園のデイサービスを紹介され、利用が始まった。また、専門医を受診しアルツハイマー型老年痴呆と診断された。

Iさんは5か月ほどデイ・サービスに通ったが、徘徊、家族への暴力、不眠、放尿、失禁などの行動が目立ち、妻の介護疲れが極限にきたので、ショートステイを利用することになった。この間にホームの職員が妻の精神的苦痛を受け止め、介護相談にのった。

ショートステイ利用中、Iさんは比較的落ち着いており、妻の介護疲れも少し取れてきた所で退所となり、再びデイ・サービスに通いはじめた。しかし1か月後、再び妻への暴力行為などが多くなり、2回目のショートステイ利用となる。

妻はIさんの暴力や徘徊などの行動がおさまれば、家で介護する意志であり、近県に単身赴任している一人息子も、週末には帰宅し介護に協力している。

事例7 (つづき)

ひたすら仕事に打ち込んでいたIさんの、定年後のあまりもの変わりように、息子ともども驚き、目の前がまっ暗になっていたが、家で介護して行きたいという気持ちになれたのは、デイサービスやショートステイ利用の際に相談に乗ってもらえたおかげ、と妻は語っている。

介護者の側の、老人の見方、受け止め方が変われば、介護者の心身の負担が減るケースはよくあるが、そのためには、介護者にとって老人と物理的に距離をとる機会と、気持を受け止めてくれる人とが必要である。特に呆け老人の介護では、そのことが大変重要である。

おわりに

ショートステイは老人の在宅療養（介護）を支援するための制度であると考えらるなら、ショートステイを利用したことが在宅療養（介護）の継続にどう影響しているかを知ることが重要である。ショートステイは第一義的には家族が一時的に介護ができなくなった時乗り切るためのものであり、その意味では十分機能しているといえる。しかし、在宅療養（介護）を続ける上で、場合によってはそれ以上のことが期待できたり、逆にマイナスになることもあることがわかった。また、家族の状況、介護者と本人との関係、本人の性格など、プラスにあるいはマイナスの変化に関係している要因も、ある程度明かになった。

福祉事務所などショートステイの申請窓口では、ショートステイの受け入れ条件として、家庭で介護できない理由と本人の病状にのみ着目しているが、ショートステイを担うホームの職員やショートステイの利用をアドバイスする保健婦、訪問看護婦などは、もっと幅広く本人や家族の状況に目を向け、ショート

ステイ利用による影響を予測する必要があるだろう。

また、今回の研究では明らかにしえなかったが、ショートステイ利用による在宅療養への影響は、ショートステイ受け入れ施設のケアの質とも深くかかわっていると考えられるため、ケアの質の向上と格差是正をはかる手だてが講じられるべきであろう。

なお今回の調査では、ショートステイ利用による変化、特にマイナスの変化があったケースが少なかったため、変化に影響している要因の分析も不十分なものに終わった。変化のあったとするケースが少なかったのは、調査実施上の制約及び方法上の未熟とも関係があり、今後の研究の積み重ねが必要である。

他方、調査対象になったホームのケアの質の高さがマイナスの変化を防いでいる点にも注意しなければならない。老人は環境の変化からマイナスの影響を受けやすいので、それを防ぐことができたと言うだけでも、ショートステイの役割はほぼ果たせたといっても良

いくらいである。現に家族も、安心して頂けることを何より希望しているのである。

しかし、すべての施設でこのように質の高いケアが確保されているとは限らないことを考えると、起こりうるマイナスの変化を予想し、それを防ぐためにはどうすればよいかということを、実践を振り返り明確にして行く必要があると思われる。

また今後ショートステイには、一時的な家族介護の代替に留まらず、在宅療養（介護）継続の本人及び家族の能力を回復・向上させる機能の付加が期待されるかもしれない。従ってその可能性と限界及びそのためのケアのあり方についても、研究を積み重ねる必要があるだろう。